へ13
3101
5止

へ 13
門
3101
5
巻

昭和九年
七月二三日
購求

金示

天竺得瓶 仙蛙奇録巻之五

東都 爲永春水補綴

第四回

山神の祠に舎て虎王鬼を斬る
賊を尋て通教故朋輩に遇ふ

不題再説さても安井虎王八嚮に奇遇の里の山中ゆく飛鳥前の撃
き〜ときそぶ雛をさえ捕逃〜其身八深き溪に落しが底も砂礫
のそふ〜そ。多足を些〜傷まるのみ命に恙なりける這僥倖を
有もぐ〜幾十仞ゝかる溪底うまび索の絶る吊捕に苦しく出く
飯らん術なきのそ八うちも続〜殃危に或八敵と闘戦〜或八病を看
毒る心神倶に労果〜に飢えおが〜く堪ぐさけまび奈何にせまじと
四下を見るに梢の嵐や吹落〜けん楊梅のよく熟せば那首這首と

みく落ちりなるゐど是幸ひと拾採り飽まで飢を凌ぎゞ斯て登らん術なきゐ其日も虚しく溪ゐ暮しつ扨次の日ゐありけるゐ労まー氣力も稍とその人ばさりとも登る便宜やなると尚那首這首を索ね回るゐ嶺より谷ゐ藤蔓の最長く下りゐる這所ゐ些の足懸を得ゑまバ件の蔓ゐ取つきて辛じく登ると大槩半日許ゐしと原の巓ゐ到りしゞ甦生ー心地しつ且内君の死骸を仮ゐ葬り奉らんと其辺りを見まども甚麼やきけん道芝ゐ血しやの迹の残りしのみ軀ハ失せ在らざりけり偖ハ夜前狼ゐンどの啄去しものなると憶へバ悲しくて腸を断たりゐる虎王ハなや是まで刀の柄ゐを係しゞ否我茲ゐ自殺るとも撃まるひしー夫人の蘇生ゐふもなりゞ且夫人の肌ゐ探題の印を着ゐふを軀と倶ゐ失ひくハ吾過ちハりゐく

重なり縱獣の啄去とも這山中を限なくひきくバ軀を得ざる支ハなる加旃初音とやらン那老媼ゐも遺恨なり渠ゞ在家も索ねべく且内君を撃まりー當の敵の面躰もしらゐ夫と視とゐおけバ這奴をも捕へく怨を報ん仐して後ゐ姫ゐ侶俱見失ひる呉羽ぬーの踪跡を見く綷云云と听へひげゐるゐふーも腹を砍く遲きゐひゐゞ吁然なりと肚裏ゐ思ひ決り其日より尚山深くこけ入て只管索ね回ると既ゐしく一旬許り斯ハ心を費をものゝかの夫人の軀ハさゐなり初音の媼さゑ鎌六ゐさゑ竟ゐ得會ざりしゞ今ハーも詮術なけまど仐しく止べきとなるゞ尚も諸國を徑回りく其一個をゞも捕得ざゑ人と生まー甲斐なりゞと志を挫り空て頭をめぐらしく稍九州へ赴くやどゐ行々て豊後國霧嶋山の麓ゐ来ゐけり

秋の日のたゞ斜めて未下刻ゆゑ姑且てゆく足を憩め夜を
うけく歩みゐるべきまゝ三四里ハ遇るべしと其里盡所の酒舗なる徒儿ゆ
屁をうち懸つ村酒一盃を吃しあゆりて前路の遠近路次の便宜を左
右と問蒐るべ主翁とおぼしき一箇の老爺年紀も六十許なるが虎王の
爲躰を東視西視つ找きよりゆ偖ハもん身ハ此程よりの噂をのまゞ知し
召ぞや近頃這霧嶋山を昼よりゆ過て通るものハ鬼出て喰ふゆ。昼ゞ
斯のごとくなるを今たゞ晡時ゆ程もなくゆん。是首よりしく巔まゞハ
大約三里半道なれども山ゆしゆ四里ゆも歇へり。今より急ぎのゆとも
二里まゞ遇ゞ日ハ昏なん。余をゞバ夜道ハいよく危し。今宵ハ這所ゆ
止宿て夜明て後ゆ道伴を待合せく踰のゆべしと。ものゆを虎王所ゆ人ゞ
腰裡ゆ思ふ事ゆ。ゆ全く這主翁が斯る先由事を言ふゆ。旅行者の

ゆ。足を禁を客儀の餞をものせんと。鈍くも伐倆しものゆうんとゆくも
得所ゞ冷笑ひ。俺苟も武夫と生を幼稚より剣法を学びしハ
何の爲ぞや。余る支ゆゆバ用んと思ふゆ故の修行ぞしゆ。旗世中ゆ
鬼とものゆるべきまうゆ。尚古ゆハ蛇と唱へ人代ゆゆて襲と嗔び。
夫より後ハ鬼とものひ土蜘蛛とものゆりしも并是盗賊の支ゆりき今你ゆが
鬼とゆ又ゞ山客前径の傳欠俺何ゞ余ゞりの慝恤ゆりを遇る
べき路を阿容く止らんや。鳥滸ゆる支をと説破りて稍其家を立出ゆ山
路をきして急ぐ程ゆ一里半道余りゆしく日影もゆる黄昏の天ゆ曇
山ふところのさらぬも闇き樹下蔭ゆ前路も判ぎゆりしゆ心有製ゆ安らぬ
虎王ハ這所ゆ到りく再び思ひやるを。俺只管ゆ武勇ゆ誇り身の
危きを知らぬゆゆゆ酒店のゆりゞ賣弄言ハ只世渡りの方便の

土俗の言ハ特ひ不足らぬと侮りしより諫を聽ぎ買べかりける。松明を請ふ忘れて出うしへ脱落ふけりと悔めども又今更ふ詮術なく其処とも知らぬ崎嶇を足ふ信せて辿るゆぞ何時の程ゆ天霄て十九日の月樹間を昇り夜ハたや二更ふ迹うけり虎王是ふ便着を得て四下隈なく見めぐらふ行方の路の傍ふ些少る祠あり柱斜ふ軒頃きて半朽たる板塚ゆ草茫々と生重りて正面ふ遍額ありて山神祠とあん僅ふ三字の読まうとて究竟の物とをひまを今宵ハ這所ふ明さあらぬ裡ふ入らまくあるを忽地傍の茂みより頭を出る鬼形の癖者額ふ二ツの角を生ひ長る髪を振乱せり鉄の棒おりとりのべ虎王目がけて打て蒐るを扨ハ癖者ときこゆと抜合せて斬ひたひしが虎王焦ッて打太刀を那癖者が受負ッ阿呀と一声叫ひ後をも視ずして逃行を道ハせじと追蒐る折も再び天結陰り

霎時東西を失ひけるとぞ。虎王も暴虎憑河の戒を思ひ忘ずして元の祠ふ立ぬるふ。秋の初ハ言ふぐら。斯る深山の事なれば寒氣肌へを猶しけるふ。をとらを尋て落葉枯枝をんどを集め是ふ火を移し焚火して四下を見るふ怪しき物落散て有るを手ふ取あげて熟視るふ是鬼の面を。西断ふ斬割るゆてありけり。茲ふおもひて虎王ハ。偖こそ我思ふ違ひぬ。今の鬼ハ實の鬼ゆハあらぬぞして盗賊の斯る面を冠き鬼の様ふ打扮るハ。旅客を刼ぬて行李路銀を奪ハんとの仕価なべし。恐ろしくと頓て崩まるゆ。狐格子をひらひて奥のくふさぐりつり。朽ち残りる板敷の上ふ匍匐して荷物を枕ゆ。眠りふつんとまぎれど。生憎ふ渓川の流松風の音耳をおどろかして。いも寐らまぐ。行末越方の事を思ひつづる折ふ。遥ふ人の來るけはひきるふ虎王ハ耳を欹て。扨い

最前の盗賊の同類をうらひ。再我を尋ね來るゆゑ。先竊ゆ其動静を窺ひ見ずゆと。孤格子のうげうゆ覗見るゆ。こハ甚麼ゆ偷児ゆあらで。一個の大漢児今虎王ゆ林人さゝらる。枯柴の辺ゆ歩みよるを。倩見るゆ面体ハ火影ゆ治定と見へねども。其さゑ旅客とおぼゝく。長き両腰を佩るゆ。火の下ゆ動下と座し。獨言ていはく。我うくまでゆ姫君の御行方を探まひらまれど。今以て知まざるゝ上ハ。過さり玉ひし御主君世ゆ在まを夫人ゆ。何面目の有て。再び見へ奉らん。潔く腹うきさゝを。死て。魄ハ冥土ゆ。ゆくゆ。俺君ゆ勸解奉り。魂ハ陽府ゆとゞまりて。八百日姫上の御踪跡を探し出さでおくべきうと。拳を握り牙をうゝ。物狂ハしく見へけるゆ。頃て諸肌おぬぎて。腋刀をぬきりと拔もうゝ。既ゆ腹へ突立んとまる爲体ゆ。虎王ハ是盗賊の類ゆあらざるを知り。何ゆもせよ其自殺をとゞめざるとゝよ待

玉へ只一言のゆべき事ありと。声うるとゆ。彼武士ハ思ひがけるき事うるゆ。此声ゆ驚死又をとゞめてとうるを見へ。うちゆ虎王ハ遽しく飛で出。白刃を持しうる手ゆ携り。死んとまで覚悟極め玉ひしハ。定め深き縁故も有べけゝ。死ハ一旦ゆして易く。生ハ難しとやらん。まづく思ひとゞまりて。其縁故を審らゆ告玉へ。武士ハ相互うるまゝ。又鬼も角も詮術有らんとゆゆ。彼武士ハ聞て。首を左右ゆ打ふり。否々何処の御方うハさらねども。我死をとゝめ實意ゆる其詞うるまゝ。是ゆハ萬般の深き様子有て。御主君より預すひうせし。姫君と又二世と契りし我妹子を。怪物の爲ゆ奪ひ去られ。此四五日斯夜とゝく書とゝく。深山幽谷を探し求るとゝ。其踪跡知まざるハ。ゆ怪物の爲ゆ。ゆいだき去らまを給ひしゆ。疑ひるけまバ只潔く相果より外詮術ゆ。とゞめ玉ふゆ情ゆ以て情ゆあらぎとゝくを離しねと。燒立て

引れをさんとするを。尚離さじと爭ふ折ふしふ。颯と吹下る夜嵐ふ發
と燃つく枯柴の火影ふ二個ハ倩顔見合て愕然として你ハ姉婿文野
太郎通教ぬーあハおまぎぞとのふ声聞て彼武士ハ。東視西視々。大き
ふ駭き。然云ふ你ハ呉羽ぶ弟。虎王ぞやとん〳〵奈何とぞうふそ。霎
時のともいとぎりーが稍あつて虎王ハ通教ふ對ひ只余所事ふ聞う
たぶ主君の姫二世の妻と宣せーハ韓衣姫呉羽ぬーのうくあそあうみうふ怪
物の爲ふ奪ひ去られーとハ如何ぞうふ故ぞ疾く其顛末を審ふ語りてき
うー玉へと急ぐー立るふ文野太郎ハ。吐息をつき面目なき安井ぬー。我
君の御不興を蒙り。浪々の身となり。伯耆の國赤崎の浦曲ふ住て。
名を世継瀬平と改め世の動静を伺ひーふ過る日弓ケ濱ふ於て。
不意韓衣姫妻呉羽ぶ。危難の場所ふ行うり救ひまわらせて赤崎の

浦曲ふ誘ひ娘と偽り忍ぶ世ふきーぶ云々の事よりして先君直冬公
御言号あるー。婿義楠正節公ふ環會ーぶ其時又云々の事ふより
て。赤崎の浦を立退き。正節公ふも引ひるき。諸々方々を吟呻うち。
此五日以前。ちとある禿倉の裡ふ。一ト夜を明さんとせーふ更闌て鬼
形の者あらはるーを。我其鬼形とうあひ。其跡を追行ーぶ。木下
闇ふ竟ふ彼異形の者を見失ひ立戻りて見まぐれ奈何ふ。姫君も
呉羽も。禿倉の裡ふ居らぎ。扨ハ妖怪の爲ふ奪ひ去らぎ給ひーう
と。口惜ーく韓衣さま姫君と聲の限りふよべど叫べど。答ふる
者も嵐吹く峰の松風音のみふして詮術なければ。夫より此山中ぜ
吟行めぐりて。探ー覓るといくども更ふ御徃方の知れざるハ畢竟ら
の妖怪の爲ふ。御命を失ひ玉ひーふて。有らんぎらんと思ふふつけて

所詮存命て。你や夫人の環會て。何と言譯辞あらんと覚悟極め。生害なき夫人さ。おき豫て姫君や呉羽が物語を聞けば。汝ハ夫人飛鳥の前さ。と。預り奉り香炉谷のおくて。姫君們とさ。ぎて。と聞。ぐ。夫人の御安体なりやと問まて虎王面なげの。今兄の斯問まを。らせて我も又影護事のなぎりなれどいつぐなる飛鳥の前の。御身のまて。奇縁の里とらの所まて。貞村が追手の為の無愛最期我も當下既の死なんとせしなど。夫人の仇をも撃ち。探題の印をも取返さん。惜うらぬ命を今日までも。存命さぐりの。我ゆへまて。你ハ韓衣姫羽ぬしの往方を失ふとなくも。其生死の程も定ならぬの。さなりて命を捨玉ふ事なの。數ならねども吾儕なりとも力を合て探し出しまらば。せん我儕最前此所まて。ホ々の妖怪の出合既の仕留なりと思ひ。

の其僻者の逃ゆる迹の落しハ此面なり是音せとさし出まを。太郎ハ見なく驚嘆して。偖ハ這山中を徘徊なる妖怪ハ実の妖怪なるぞしく。鬼形の打扮の人を惑し。東西を探んと伎倆なる。倫児ゆくひなりつるなる。ホひらんゆ姫うゆを。倡引し僻者も。同い道なる奴なるる為業の。こをひらんづらん倘果して然らんゆハ。あん命志なく在まん。も図りぞし。你と俱の這山中を。隈なく索ねまらるせるば必ず便者を得るとひらんとのゆの虎王一議の及ぶ。其夜ハ共れ。禿倉の裡なく過つる支など譚り明らん次の日夙の禁下のなぐり飼の准備なンど十分のとの人と再び巓の馳のなり。故意と塞なき山まを山を只管探し見ひる程の既のしく其日もまや。下晡のなりのけい。両個やとく索ね伝とひる樹下の立寄なる須臾労まを休めなる折しも傍の

賊婦

簪と拾て両士姫の安危と考ふ

大郎

とゝ王

叢ゐ何ゐやなりけん夕陽ゐ映ぐく是こと光るものなり。虎王眼だやく視出しと馳り寄りてゐ取を通教侶倶熟見るゐ豫両個ゐ覚へなりし白銀をもく造りる韓衣姫の叙ゐりけり。扨ハ件の偷児が姫うえを此ようう倡ひ来りしものゐくん然ゐらんゐハ偷児の巣穴も既ゐ途づきぬ。西下を佶と眺望ゐ遥向ふの山間より細き烟の立登るを通教夫と見究て安井性那を視よ彼所ゐ立る烟とを人家ゐるゐ疑ひ。倘偷児の巣穴ゐるゐ且疾彼所ゐ往だやとのゐゐ虎王諾ひく。倶ゐ立まく為ると忽然として尾上の方より鄙唄調ひく這方をさして来る者なり。両個ハ深く訝しを迎づくまくゐ是を視ゐ年紀ハ三十許ゐと斯る深山ゐ似氣もなく最美貌ゐる女ゐるが紫高く脊負ひて来るとさゐゐ二個を見て最怪しゐ思ひけん杖突立て徨つ。你ら人何処より何里へ通ゐ

あやと問ゐて。通教いまてくく出て。我們ハ伯耆の國の者ゐるが今日此山を越んとして過ゐて此路ゐ踏迷ひ往還へ出る事ゐるを。兎やせん角やと思ゐ所ゐりゐ。往来へ出る道あらば教へ玉りべしと。いゐゐ女打聞ひて眉を頻ゐ愛ハ往來より。三里ゐど山奥ゐて更ゐ木樵柴人も通ゐ事なし。今頃より往還へ出んとして玉ふもゐるく不知案内の你等。日のあるうちゐ出る事ゐるを。扨ゐ笑止ゐる事ゐるといゐゐ両個ハ再びいゐゐ。然らば你の家ゐ今宵一夜を明きて夜明ゐ往還まで送り玉りべし。宿銭ハのぞゐ任せてまひらせんといゐゐ女いらく。吾儕が家いらしとゐる。山半腹ゐて杣が妻ゐるとと夫ハ此程ゐを山深く。木を斬ゐ三日も帰らぬ留守ゐい妾のゐ人べきべ奈何ゐ妾ゐ如き山猿ゐ等しきものゐべとて。東道主の

留守ゐ男子を留まひら女なも影護し。此事のまゐ被し玉へと。固辞ゐ
両個ハつぶさと當惑せし面色を斯る山中ゐ争う一夜を明きるべき縦や
主人のおつさぎと我々二人連の事るとがさるでの疑ひも有まじけれど。枉て
一夜の舎りを恵み玉へかしと只管ゐ乞求めければ。彼女も今ハ推辞ぐ
くや恩ひけん稍く羨諾ひて。然まぞのまゐるをいるびまゐらせんも心ゐ
きゐ似さう。此上ハ奈何ゆも。お病ゐまのらまべし。倡こるを來り玉へと。
先ゐ立て行程ゐ両人ハ厚く礼を述て彼女の後ゐつきて歩む程ゐ彼
女ハ両個を見ゐて妾も原ハ斯る幽僻の地ゐ育し者ゆもてかも。都近
き生まるるしが。不圖くゐ山家ゐ入て後ハるくゐ里へ出んも物憂く早
晩寂寥事も忘れぞるるし。寔や諺ゐふ如く住ハ都えらん何処も同
じ事なりるぞ。打相談のぞ。何処ゐ昔の花香残りて。風流男ゐ

らんゐ。忽春情を動まぞきるるとぞ。二人ハ忠孝一圖の丈夫るまぞ。さる
不正心ハ一点ぞりもるく。這奴定めて盗賊の妻ゐて。我々をぞうり已
ぞ家ゐともるひ行。殺して盤纏を奪んとまるゆあらぬ。彼武藏野ゐ
有といふる石の枕の故事もくる事ゐやるど。思ひつぐ行程ゐ道の程
一里ぞりゐして。彼賤の女ぞ家ゐ至りぬ。山半腹ゐして浮世をさるれし。
柴の庵のさゐいと心憎し。聽て彼賤の女い裡ゐりるゐ。二個ハ草鞋歴
巾るど解まく。簀の子の上ゐわぐり。四壁を見まらをゐ都てくる山
中の一ッ家ゐハ似げるく。萬の物大くゆハ調ひて。清らゐふつきぐし。扱
女ハ厨家のくさり。小麥の焼餅とうおがしき物を。三箇四箇携持
て來て。両個ゐまくゐ。見玉ふ如き山奥るとがまひらまべきるの絶てゐし。
といへど責て是りとき。こしめして餓をたのぞ玉へし。ゐど最他事ゐく

管待ふ二個ハ眼と眼と見合て倘や蒙汗藥などの計畧のあらんも計り難しと喰べとる面色して悉く背戸の方へ持往て捨清水を汲で咽を潤し。さあらぬ体ゑて座敷へ立返り居りけ。彼是もるうち早初更の頃ふ。主の戚の女ハ両人ふ對ひ客達ハさとそ寒けくもあるとぞきぶ只一夜のことるまこバ耐忍びて寐玉へむさろしけきど彼処の納戸の裡と搔拂ひて措くまこバ入て恕々と休玉へと最懇ふ聞るふ二人ハ打よろこびとる面色しる。好意の程を禮謝し共侶ふ臥簟ふ入りぬ。主の女ハるを地炉の端ふ絲車をとる音さえ耳の底ふひりていもねられぎ。迭ふ心中ふ神佛と念じ居りけるぶ。扨々秋の夜とそ長きふ絲とる業さ倦労きて。物やしくるまて。夜並の用意ふとそ調へ置し焼餅ハ嚮ふ客人ふまひらしられハ詮術ふ。吾丈の歸り來ませし時の酒の肴ふりと貯とる大事のものるりとも。炎

つて喰べぶ。此腹の空しきと奈何せんと呟く声。二人ハ怪しく。奈何るる事をまろやらんと。隔亮のあるひより。竊ふ闚窺まこバ女ハ立て庖厨の方より。俎板と庖丁を携へ來り。押入とおがしき処より。絲ぐそふ色さる物を取出し頓てそきを打ひらくを。倩見まこバとハのふ生きて程もあらじと思ふ。嬰兒の死骸るり。両人ハ見るとり大きふ駭き。扨ハ這奴變化るる。斯る山中るまこバ。木客山姥るんどらふ。怪しる者の住家るらんも計難し。尚秘しそ其爲体を得と見まきて後。兎も角もまべしと弥息をとゝて。窺居るふ。彼女ハ件の死骸の腕と足を俎板のうえ載て。庖丁を取りて切裂くふ。鮮血とんしと流まる出るを。緯ともせど頓て鉄串とおぶし。生物ふさしつゝ炙き。地炉の辺へよせりけ。殘りハ原の如くふ。ちまひぬ。扨主ハ埋火をきおこしつ。待程ふ怪しくるるらんも香り紛々とまるを。女ハさも嬉

氣ふ鼻のあくうをおごめゐ。待居ゐ。が軈て焼ゐると見へて。彼肉を取て舌打ゐ〳〵。ある味し〳〵とこれを喰ふさる。眼の光りまるど〳〵。口ハ耳の根までさけゐるが如く。流石強氣の両個も。身の毛もいよゐよだゐふ。かゆるふ。虎王ハ此形相を見て。這奴正〳〵く變化ふ窺ゐ。化の皮を引剥て呉んぞと。既ふ飛懸んとまるを推禁めゐ。〳〵く你必血氣の勇ふまかせ王ふべゐ〳〵ぞ縦や渠妖怪變化ふもせよ。何程の事やあゐん。先そゐらぬ体を。其動静を窺ひ。倘我々ふ及向ゐ。當下一刀ふ斬てまるとも。遅きふあらずと制し止むゐふ主の女ハ彼奴ゐ〳〵ゐ肉を殘りゐく喰盡し。舌ゐあぢゐ〳〵て元の所へ居直り。又絲車を取て。何氣なき体ゐて居りける。浩る処へ外の方ふ人の來る化粧して。戸をかゐ〳〵と打敲き。今歸りゐぞ爰明けよゐ〳〵と。ふ声ふ両人ハ納戸の裡ふ有てこれを聞られも又奈何ゐる妖怪ふゐといふく油断せぞ

刀の柄を握りつゐ。息を懲して伺ひぬ畢竟爰ふ來りゐ人ゐ鬼ゐ。

下回ふ分解を聞べし。

第九回

旅客を留めて賊婦夫主の歸を待ゐ
鎌六を撃ゐて両士夫人の仇を清む

主の女ハ此声を聞て。應とゐ〳〵ふ。絲車の手をとゐめ。やをゐ立て表の戸を引明ゐふ是變化ふあらぞ。そ月代長くのび〳〵。身ふハ熊の皮の肩入〳〵ゐる。袖のゐき羽織を着て長き山刀を佩。異形の打扮しゐる大漢児あぐがまちふ尻打ゐけゐ。草鞋の紐とゐ〳〵ち。女房ハ地炉ふ麁朶折くべゐ。奈何吾夫此程打續きて。返り玉ゐぬゐ〳〵ふ定めゐ〳〵き得物も沢ゐるべし。待ゐ〳〵。仕合ゐぐゐやとゐふ。彼大漢児ハ女房ふ對ひ扨々此二三日のまのゐろき。昨日の夜さゐも例の如く山の神の禿倉の辺ふ至り見る

ふ一人の武士焚火して居るを見木蔭より顕きのぞ〳〵ふ。這奴ゞ本事なるふ
るふふ尋常ならざ。既ふ真向と切付らまゝ〳〵ど。義て用意つる如く。頭
の髪のうちふハ甲の鉢金を入置くまゝど。幸ふて恙なる〳〵ど。被る面を
バ二ッふ切割らまゝ。其処ふ落〳〵辛く逃延び。あまの命ハ拾ふ〳〵。それ
故返らんと思ひ〳〵ど。餘りふ口惜しき事へ今一夜と又今宵も宵より
網を張て待つまゝど通る人一人もなく。卦態のよろさふ還り來ることま
まで許多の旅客ふ出會まゝど這奴ゞ如き本事の人ふあるとど初く
恐〳〵き奴なる思ふふ渠ハ天狗などゆゑハあらざりけるとと言ひて足を
そゝぎ上へ揚り地炉のそばふ丈六くして。炬草なるふ〳〵居るける女房ハ
打笑ひ遊茶汲て夫の辺ふさ〳〵おきて。吾夫なる悔玉ひを言事あら
悪く悪きあらん必ず吉〳〵人間萬事塞翁なるまき事のくなるべ

て浮世の習俗ぞ〳〵此程ハ間の吉さふ一羽なるぞ二羽までも世ふ義元
嶋鳥を得る其洪福の迹ふ〳〵なるを僥倖なるき支もなりなん寔ふ
命が物種なるを惜て怪我を為ふひそと打相譚を洩さ聞る鹿王忽地
思ふ〳〵儲ハ是なる漢子ぞ。昨夜山神の禿倉ふく出會なるし
僻者なるふと尚その形容を闕窺るふ其面ざ〳〵の何ふ〳〵見覚る
所なるバ左さる右さる思ひまハをふ豈料らんや嚮ふの奇遇里の山中
ふく見失ひる飛鳥前の讐ふく〳〵なり〳〵ぶ且駛き且歓びく太郎ふ斯と
呼くゆゑ通教も又声をひそめ今那女ゞふを听くふ一羽なるぞ二羽までも
義〳〵ゑ雌鳥を獲〳〵ふ姫と呉羽ゞなるふ〳〵ぶや俺推量ふ違ハバ
這奴を捕へく乳明なるさんふ姫の安危を識よ〳〵なるんと迄ふ点頭
頷せく刀の鯉口なるゞ〳〵俟とも知らぬ女ゞなるを今宵ハ家ふ

賊計当られ搏て其身を害せ

太郎

鎌六

よゝ賓客を二個まで止宿せゝ衣服両腰も麗ゝる。些の荷物もひるのゝ重げゝ見ゆるど二個とも遅しき。面魂ゝ伝るゝゝ武藝の者ゝ力量も又並ゝ人ゝ長途の旅行ゝ労ゝて熟睡やゝけん音もゝとゝゝ件の大漢子ハうち歓べる面容ゝ開ハ宜敦をせゝまゝ遮莫おん身のひゝぞゝ武士ゝゝひゝゝゝ迂活ゝを下ゝゝゝ同類の奴輩五六個荷擔来りゝ推ゝづけん俺一走り那所ゝ到り與集て来らんゝゝゝ必ゝ捕ゝ逃ゝゝと言ひ捐て遽しゝ身拵ゝゝゝ又外の方ゝ出ゆきける。通教ハ稍闕窺ゝて虎王ゝ小獻と見て侮るべゝゝず。大獻と見て懼るべゝゝゝ三略の上ゝゝゝ今奴漢怖ゝ者ゝゝゝゝゝ同類許多ゝゝん夫ゝ為ゝゝゝられ當の獻を捕逃ゝの

不覚を取らんも計り難ゝ。不如今の間ゝ裏手ゝゝ竊ゝ道を出で這奴ゝ跡ゝゝゝ行て渠ゝ捕ゝゝべゝゝゝゝゝ雨戸をあけ。生垣をゝゝゝ。両人ハ難ゝゝ裏手の方ゝ出けゝゝ幸ゝゝ廿日亥中の月代山路をゝゝゝける程ゝ天の與ゝゝ遥ゝゝゝ見ゝゝ彼盗賊ハ半町ゝゝゝ先を行く様子ゝ嬉しゝく。直走りゝ走り付き。虎王ハ声ゝけて。おのゝ女賊ゝゝく行くゝゝ逃るゝゝ逃ゝゝゝゝゝ大音声ゝ呼ゝけゝゝ彼賊ハ思ひゝけるゝ此詞ゝゝゝ慌忙き逃んとする処へ。両人ハ馳付き矢庭ゝ襟髪を掻握んで引きゝゝんとするゝ振拂ひ叶ゝゝゝゝゝ思ひけん山刀を抜て斬てゝるゝ両個ハ心得て拔放ゝ。要時ゝ程ハ戰ひゝゝ。爭ゝ両個ゝ修練ゝ及ゝき。難ゝく刀を打落ゝ。下緒を取て高手小手ゝ縛ゝ。傍の樹ゝ繋ぎ。虎王ハ彼賊ゝ對ひ汝ゝ面体ハ吾少ゝく見覚ゝあり。日外因幡と美作の間道ゝ

一個の女と手をうけ。首を擊とるハ正しく汝う仕業なるゝん。加之昨日の夜きり。山の神の禿倉ゑ。鬼の姿を打扮。旅客を劫うせしも汝なるゝん。白地を首伏せよ。當時の旅の者ハ吾齊なりと責問ふ。初の程ハ只知らぬとの答へしが。竟ハ苦痛ゆえなね。此うへハ何も彼も首狀まべ。いかゆも汝が推量ゆ違ひぬ。我先年奇遇の里の辺りゆ住ひ。鋼鉄の鎖六とよぐる強盜なるが。輪笠の城の落人翼ぬられし飛鳥の前打取てさらさべ。褒美の金ハ望次第と。赤松貞村殿の家臣得藤五郎次郎とふ侍ゆ頼まれ。跡追欠し山中の辻堂ゑ。何の苦もなく彼飛鳥の前を殺害し。這奴が首級ハその場ゆおかく。うねく憑みの貞村公ゆ遞與せし折柄。追うけ來て我をさく〳〵童男めハ汝をありけるゝ。我當下一刀ゆ斫り殺さべうゝを助け置るゝを口惜けまと。さも憎さげゆ言けまべ。虎王ハ大きゆ怒り扨とて我思ふゆ違ひぬ。夫人の敵ゆ有けるよ骨をひしぎてくまんぞと。立くらんとまるを。太郎通教ちぐしと推留め。やよ盜賊まうをまのゝゆ有へくらぬ。五日以前彼処なる山の神の禿倉ゆて。我伴ひなる十六七なる眉目よき女と。三十四五なる女房を。那里へゝ勾引し行しも。正しく汝が為業なるゝんと。又責問ふ事數回ゆて。漸くゆくうけるゝ。奈何ゆも汝ら同伴うまうれぬ。四五日さきゆ美しき女二個山の神の禿倉ゑ休らひ居ると。我例のごとく鬼形ゆ打扮て。劫し仲間の奴原せて奪ひ取らせしが。折ふくも人肉經紀此辺ゆ來合て居ゝまべ。直さゑ賣渡とやまり。最早此外ゆ首狀まべき支ゑ。疾々赦ド玉うれぐしとゝふゆ文野太郎ハ大きゆ駭きこハ何とせん我妻ハ鬼もあま。大切なる姫君を浮川竹の流ゆ

立ーまひらーてハ縱御命ゐ怠るーとも。先君直冬公飛鳥の前さゑ
へ對ーて申譯さゞ。而々その行先ハ何の國何の所と尚責問事ゑ
きりゆーて。漸くいるゑう。その往先ハ必ーも。遊里ゐあらぎ。攝津ーの國
摩耶山の奥谷。天竺が洞とゆふ処ゐ近頃より一人の立家傑あり是を
天竺得兵衛と諢名ーて專江湖上の豪傑を集めようべるき人を
恵む此天竺得兵衛ゑ洞ゆ。ーつべき女子るき七人て黄金をりて眉
目よろき女を見るゆ。其処へ賣渡さるりと。彼人肉經紀いりて。斯
你ら妻子ハ必ぎ摩耶山天竺が洞ゐ有べーと。告るを聞て再び駭
けハ聞不と口惜ーや誰有らん足利直冬公の御息女を盗賊野武士
の嬖妾ゐるを支。是全く我罪ゑり。思ふゐ吾妻姫君も貞操正ーく
まーませべ。縱奈何ゑる責苦ゐ逢玉ふとも。るゑ〜身を穢まべきゐ有

れハ其恥ゑーめをうけぬ〜ち自ら刃ゐ伏玉ハん支必定せり。然ある時ハ
不便ゑ〜ら助けゑ〜と。忽氷るを一刀を拔そむゐ閃まとと見へけるが首
ハ前ゑぞ落ーうけり。文野の太郎ハ其首級を數回足下ゐ踏て漸く恨
を散じけゑ虎王ハ此体を見て。少ーく遺恨をたゑーしけるが再び通教ゐ對ひ
是を以て思へバ。這奴が妻も妖怪ゐハあらざりけるゑ。然るゐも最前孩児
の肉を喰ひゑ形相ゑも人間とハ見へぢ。最不審ことの〜ぎりるれハ今よ
ゑ引返ーて。渠をも打取り。後の憂をたゑふべーとゆふゐ大郎もだと同じ
両個ハ彼盗賊ら首を携へりとの一ハ家へ立歸り。垣の〜づまより潛入て納
戸ゐひとり紙門のあるひより覗見るゐ。あるーの女ハ猶糸車をまハーるゑ。
夫の還りを待不樂ーげるる面色ゑ。るゑで斯遲き事よ。倘や朋友の誰渠
も。夜稼ゐ〜ぞ家ゐあらぬゆ。るゑ。嗟きあるゐ爲濟ーうと通教ハ今目

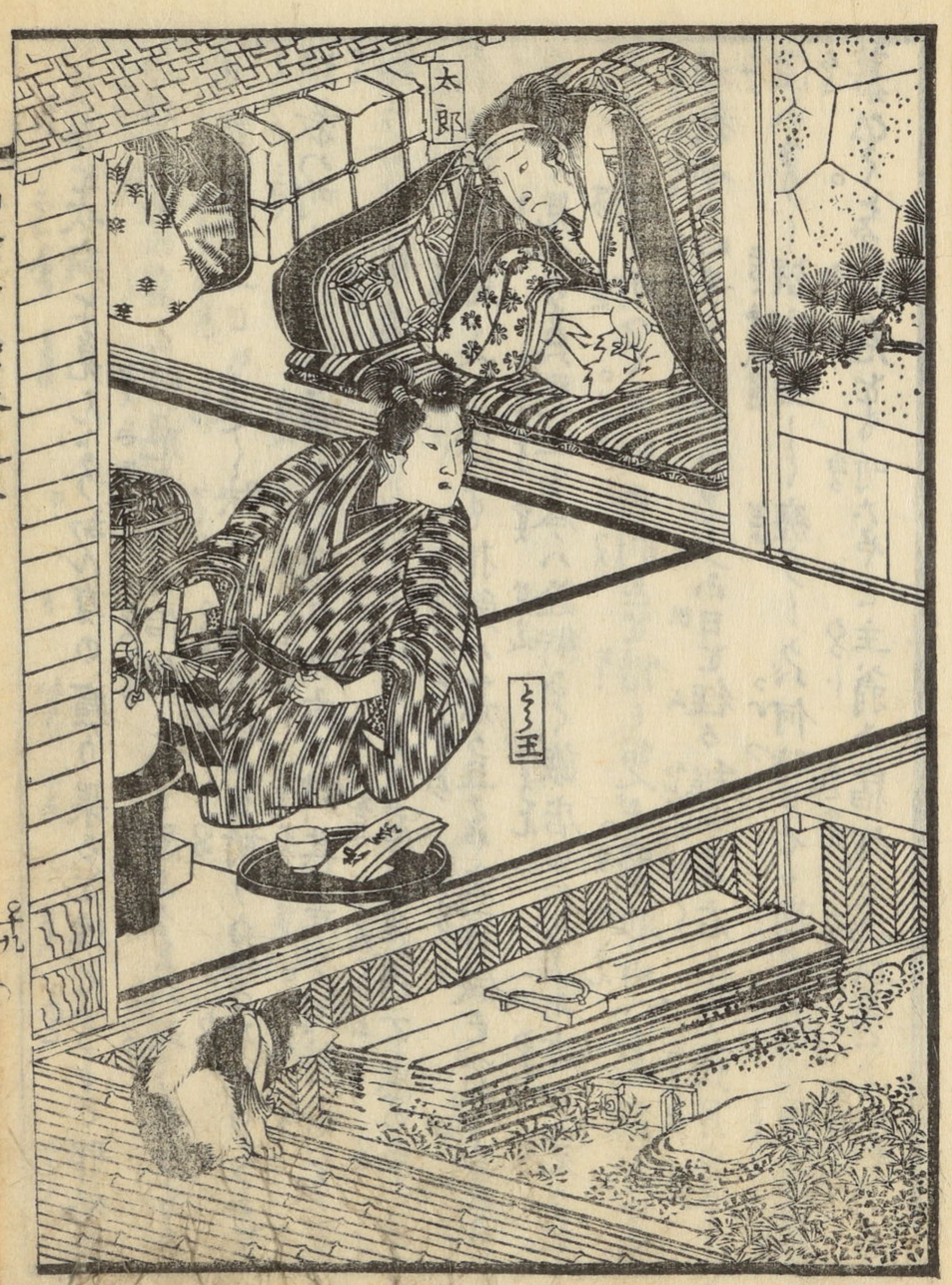
の覚し面色ゆゑ咳くつゝ一室を出ろを賤女ハ見て奈何賓客ハ何と寐玉ひゐろ
とゝふゆ吾々秋の夜のあまりゆ長きゆ寐草臥て腹さゝくゝるゝしまく。此所へ
出来れり嚮ゆ紙明のあるさより。窺見居されば何やらんいと味そるゆ喰
べ玉ひゐろものあり。奈何るるものゆゑ苦くゝるまゝ少くゝつゝ與へ玉へゝと。
ゆふゆ賤の女ハ有繋ゆ顔打赤め扨ハ嚮ゆ妾多くて食くゝるを見玉ひゝや
さこそ怪くゝ恐ろくゝも。思ひ玉ひつゝんぞあまゝ則猿の肝籠りゆゑ。山家ゆハ
殊ゆ賞翫まるものるゝ。るゝくゝ都人の口ゆ合ゑべきものゆあゝまを疑ゑくゝハ
是ゝたるハせと。言ハけて押入より彼糸ゑを取出し開て見るゆ通教ハ
漸く疑を晴くゝ最前孩児るゝと思ひゝ猿の肝籠りゆてあるけるゝと。
打笑ひゝゑ扨再び女ゆ對ひ然らば我方ゆ今日爰へ來る道さゝら得と
る物あり甚と珍らしきものるゝど今宵一夜の舍りを恵ゝ玉ひゝ御

禮ゆまひらもべくと。袱ゆ包ゝるる鎌六ゑ頭を引ゑ出せば。女房ハ不審氣ゆ打ゆ
ゑめ。何るハちらゝさゝべくと。土産とあゝハ推辞とてまゝくゝ。賞翫とゝらゝ
ゝと言ひつゝ袱包をときけるゑ。ハ奈何月代長く。延るる男子の首級ゆゑ有
けるゝば。ゝるゝと駭きるゑゝ。其面体をつゝく見るゆ紛ゆるゝるき夫鎌六ゑ首
ゆゑありけるゝば。再ひ仰天し暫く呆れて詞ゆ。虎王とゝくゝ一室ゝりゑゝ
いそ。彼女を確と白眼へ汝賊婦ゝくゝも我々を賊ゝ。此家ゆゝめ夫ゆ告て
同類を聚ひ殺さんと二ゝゝるゝぞ。我々夫を伺ひ聞。汝ゑ夫の跡を慕ひ直さ
ま追付かゝの形容るゝ此鎌六とやらんとゝ。今宵我們を殺さんとせゝのゝゝ
ゝ。嚮ゆ奇遇の里とゝふ所ゆゑ。我主君の夫人を殺害ゆ。又四五日以前
も大切るゝ。姫君と我姉を勾引せゝも皆這奴ゑ爲業るゝゝ。鬼でも角で
も助ゑゝき奴るゝゝ斯の如く手ゆ手ゆけゝり。汝も夫の伴せゝ。死手の山路へ

送りとゞけん覚悟せよと斬て蒐らんとまるを文野太郎姑く推とゞ此賊婦
其行ひいろゝも憎むべしとゝ人ども偽ゝも せよ我々ゝ宿を借さう恩あまべ暫く
其罪を赦して此山中ゝ繋ぎおき倘人あり其縛を解やらば命まうゝ又斯
る幽僻の地なるまゝ仲間の盗賊等も來らぬ竟ゝ餓て死さう或ゝ猪狼の
餌食とゝらんと必定せりこ躰て渠をとらゝて高手小手ゝ縛め大木の
幹ゝてゝ付け其足下へ鎌六ゞ首をおきて足下ゝ掛けさせ是ゝ少しゝ腹
たいうと。權らく焚火して労をを休めぬ東西まるゝ手ゝ東ゝまるゝけれゝ両
個ゝ漸々山路をとゞりくて林麓村へ出ゝけるゝゝ心嬉しく再び津の國の方へと心
さぬ斯て虎王通教の両個ゝ夜を日ゝ續て道を急ぐとゝ人ども戰國の習
なれゝ容易く道を中ゝ事あるゝ辛ゝて備後の國尾の道とゝゝ処まで來ゝ
けるゝ太郎通教ゝ此程よりの心づゝ痛の疾とまるゝ今ゝ殆々行まゝけ

ゝ虎王ゝ駄き患ひとまる方ゝ舍を見ゝ介抱等閑なるゝめ
くゝ斯る辟とく這まうゝ醫師もゝく只買薬ゝど
爲々心を尽しと看病ども瘥べうも視へざりける徒ゝ月ゝ変十日
許り徒ゝ日を過をゝ通教頻りゝ氣を焦ちく虎王を招くゝ
ゝ俺不意病ゝ犯さまゝ身の足を止るうち小倘姫君のおん
うゝゝ過ちのゝゝんゝ脇を噛ともその甲斐なゝ只俺支ゝうち捐て
你一個摩那山ゝ赴き姫うゝゝ虎羽をも救ひ出しくゝゝ
虎王所ゝ人を否某ゝ夫人を討まるゝ影護ゝ邂逅回會まるゝ
せー妬婿の痴を余所ゝ見て何面目ゝ姫君や姉うゝゝ見まくゝ
俺些ゝく武藝ゝ嗜めど歳若くゝ才足らぬ身の撫助を受
るゝゝゝゝ戎百名り桶籠る山洞ゝ赴きく容易く姫を救ひ

通教病床ニ虎
王を激ス


太郎
王

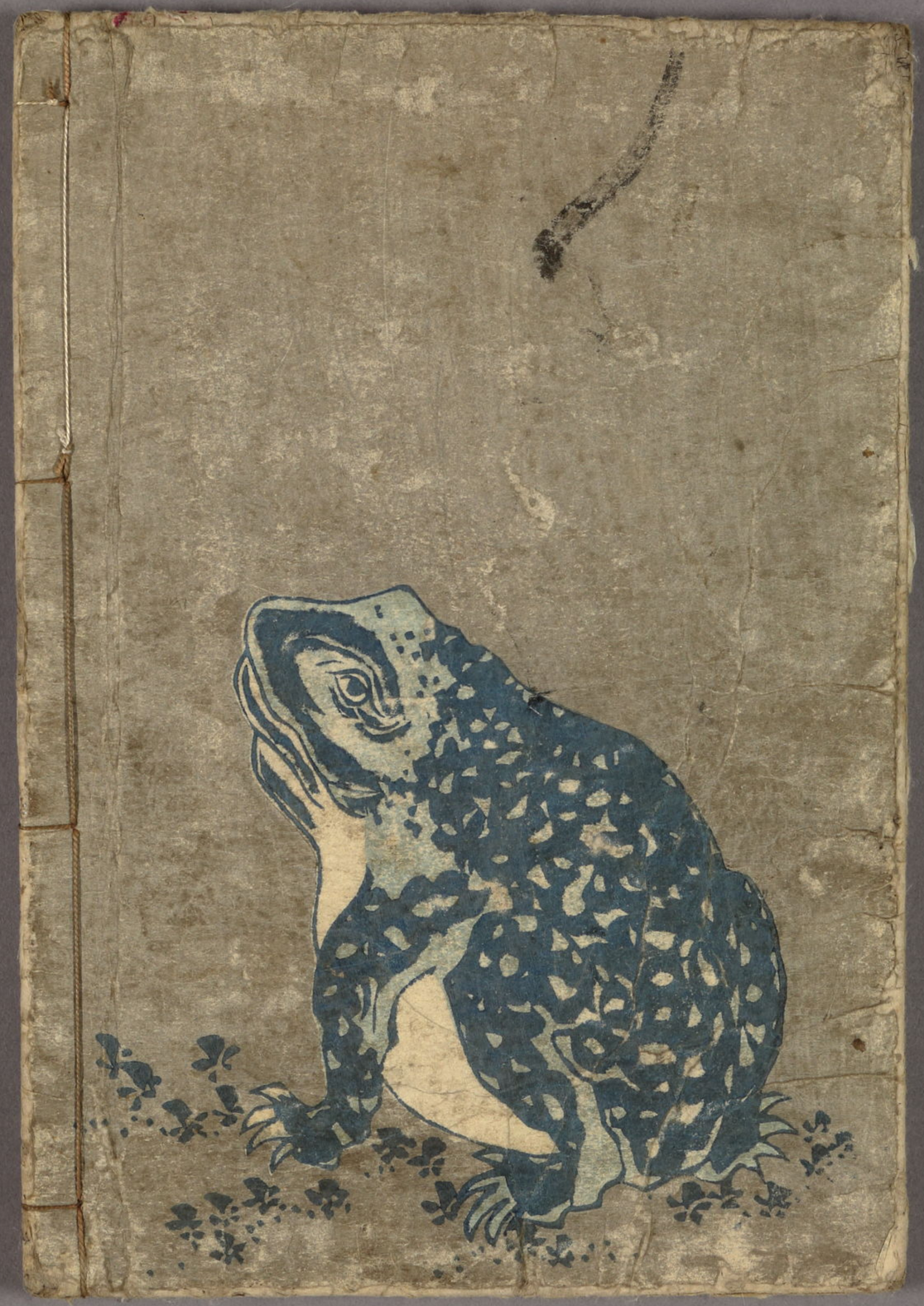
うり毛を吹疵を見んとう。おん身の瘥り果るを俟て速に那処ゐ分登りおん身と安危存亡を伴俱とのみ思ふるべし此うゑともゐ保養を加へ一日も速く快復の時の到るを祈りゆへ。力をつくるを通教ハ所もおくるゝ首を打掉り和主の辞甚差り何時果べうも料りがたし。俺癪ゐうらひて大切の支を怠らば是将不忠の至りう。疾く那地ゐ赴くべし。恁も推辭バ某が且ゐ生害做をべしと氣色変りく見へけるべ虎王も今ハ詮術なく旅店のいるゝゐ迹の支など。左右ゐ憑を所へく。太郎ゐ別れを惜みゆゑ。摩耶山へとぞ急ぎける。通教今ハ心安しと思ひるゐらゐ日を経る程ゐ左右〳〵長月の末も僅ゐ〳〵頃病些〳〵瘥りゆゑ何時もゐ斯ているべき虎王が迹を慕ひく。安危をも所なや。と主翁ゐ宿銭を拂ひなどゐ山程ゐの

禮をのべ尾の道を立出日を経て吉備の中山ゐさかりゐ然るゐ此月ハ天色朦朧〳〵。秋の末るゐ〳〵寒風さびく。殆々行ゐやうる所ゐ。太郎が心痛の病ひ再び發し。行歩自在ならぬ既ゐ心地死ぬべう覚へけるとある樹の下ゐ動下と座をあり。鬼ても病の為ゐ命を落さんよりハ潔く腹切て死るゐ不如と。腰刀を抜ゐ〳〵腹ゐ突立んとする折ゐ。後の方ゐ声有つて。

齢ひめでたき千歳の松ハ霜ゐ枯ゐまぬ雪ゐも折ゐぬ。冬の山路ゐ獨立て〳〵〳〵〳〵調ゐ声ゐ。通教ハ聞ゐ見るゐ是木樵とおぼしき老翁さぞく居さう。當下老翁太郎ゐ對ひ你が顔色を見るゐ心痛ゐ苦しゝ妥ゐ命を捨んとし玉ふ覺悟と見へるとも。命数ゆまゝ盡ぬ。倩你が人相を觀るゐ大事をうく居玉ふ人とおぼ〳〵きゐ其大事をうく〳〵。些の病苦ゐ得耐ぎ〳〵自ら刃ゐ伏んとハ匹夫の勇ゆ〳〵大丈夫の所為ゐあらぬ今

我調へる鄙謡を何とか聞玉へる。敷もぐさき千歳の松とハ國乱れ忠臣も
皆陣没せ一ぬるふ。獨り殘れる人をいふ。霜ハ枯れ雪ハ折れぬとハ。如
何ぞ百折千磨の憂苦ゆも。雪の操の心を續せ。冬の山路の雪中の孤
忠七全とふ。再び春ハ遇ふ大望成就の時ぞ。ハと。說破らきと
通教ハ悃然とうてきうつむき。霊妙時鮮もろりけ。畢竟此木樵の老翁
ハ。何等の人ぞ。丹ハ第二輯の分解を聞玉ふべし。

釜示

天竺花開記録
仙蛙奇録巻之五終

作者　為永春水稿本
繡像　葛飾為齋画
嘉永六年癸丑孟春新刻
書林
京東堀川二条下ル　越後屋治兵衛
同寺町五条上ル　山城屋佐兵衛
江戸大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
大阪心斎橋通博労町角　河内屋茂兵衛
同心斎橋筋本町角　河内屋藤兵衛